AI 物流は、信頼から動き出す。

製造業・物流の未来をつくる 11 人のメッセージ

2026 年 10 月 14 日｜広島国際会議場

はじめに｜カンファレンスで生まれた問い

製造業と物流は、いま大きな転換点に立っている。人手不足、輸送力の制約、複雑化するサプライチェーン。そこに AI の急速な進化が重なり、これまで人が経験と調整によって支えてきた判断のあり方が問われている。

2026 年 10 月 14 日に広島で開催された「製造業 AI 物流カンファレンス 2026 in 広島」は、この変化を単に技術の進歩として語るのではなく、製造業・物流の現場で安全に使い、企業と人をつなぎ、持続的な価値を生み出すために何が必要かを考える場として企画された。

その核心にある問いは明快だ。AI の判断を、現場と企業はどのような条件で信頼し、採用し、実行できるのか。現場の効率だけでなく、安全・品質・安定供給、取引先との公正な関係、そして意思決定の責任をどう守るのか。

このメッセージ集を発行する意味

カンファレンスで交わされた視点を一日の出来事で終わらせず、社会実装へ引き継ぐために、本書を編んだ。登壇者から寄せられた 11 のメッセージには、AI を使う主体も立場も違うからこそ見えてくる、実装の条件が凝縮されている。

本書は登壇内容の逐語録でも、追加取材を行った対談記録でもない。共通のテーマに対して寄せられた原文を収録し、読み進めるための章立てと編集解説を加えた「寄稿メッセージによるインタビュー特集」である。各メッセージは執筆者本人の見解であり、編集解説は主催者による整理である。

カンファレンスの成果は、単に参加人数や開催実績だけでは測れない。異なる組織の問題意識を見える形にし、次の対話、実証、協働へつなげることにこそ意味がある。本書が、その共通言語の一つになることを願っている。

この場から見えてきた、五つの実装課題

- 判断の検証可能性——AI の提案が、あらかじめ決めた条件を満たすか確かめられること。
- 人と AI の責任分担——判断支援と最終意思決定の境界を明確にすること。
- 現場知の継承——暗黙知やモノの動きを、改善に使える情報へ変えること。

- 企業間の合意形成——効率だけでなく、各社の目的と制約を踏まえて協働すること。
- 制度と実装の接続——行政施策、ルール、技術を具体的な運用につなぐこと。

第 1 章｜信頼できる AI は、どうつくられるのか

AI の出力を受け入れる条件、検証、責任を明らかにすること。それが、企業活動に AI を組み込むための出発点になる。

東　聖也 氏

株式会社オンザリンクス｜代表取締役　/　広島 AI アシュアランス協議会｜代表

登壇テーマ：AI で物流はどう変わるのか？〜100 年続いた常識が、今日、終わりを迎える。〜

寄稿メッセージ

> 私が最も大切だと考えるのは、AI の判断を「検証可能」にすることです。製造業や物流では、企業ごとに目的や制約が異なります。だからこそ、AI 同士が目的を翻訳し、合意した判断が特定企業の一方的な不利益になっていないかを確認できる仕組みが、信頼できる AI の実装には必要です。

編集解説｜企業ごとに異なる目的や制約を踏まえ、AI による合意が特定の企業に不利益を強いることのないよう検証する視点を示す。

前木　秀光 氏

株式会社 AI アシュアランス｜代表取締役／責任 OS 開発者

登壇テーマ：AI が製造業の競争ルールを変える

寄稿メッセージ

> 広島 AI プロセスを現場で実装するうえで最も重要なのは、AI の判断を単に「信じる」のではなく、どの条件を満たしたときだけ採用・実行できるかを企業ルールとして明確にすることだと考えます。判断根拠と採用条件を検証可能な形で残し、条件を満たさない判断は採用・実行できない仕組みにすることで、「安全、安心で信頼できる AI」を実際の現場につなげていけます。

編集解説｜AI の判断を採用・実行してよい条件を事前に定め、守れない場合は実行しない仕組みを提起する。

今井　勝行 氏

株式会社シーイーシー｜ソリューションセグメント インダストリーソリューション事業部 パブリックビジネス部 グループマネージャー

登壇テーマ：待機問題は現場課題ではない。経営リスクだ

寄稿メッセージ

> 製造業・物流業は、サプライチェーンの中で企業活動を行っている点が大きな特徴です。そのため AI を業務活用する際には、サプライチェーン全体を見据えた安全設計が欠かせません。開発段階でリスク評価・バイアス検証・説明可能性を設計に組み込み、取引先を含むデータ連携の範囲や管理方針を定めておくことが、安全・安心で信頼できる AI の実現につながると考えています。

編集解説｜リスク評価・バイアス検証・説明可能性とデータ管理を、開発段階から設計に組み込むべきとする。

第 2 章｜人と AI の役割を設計する

現場が守るべき安全・品質・供給の価値。AI を有効に使うには、判断を支える技術と責任を担う人の関係を設計しなければならない。

濵田健介 氏

マツダ株式会社　生産管理・物流本部｜副本部長

登壇テーマ：パネルディスカッション「広島は、AI 物流の実験都市になれるのか？」

寄稿メッセージ

> AI は人の判断に代わる存在ではなく、人の判断を支援する存在だと考えています。AI が膨大なデータから示唆や選択肢を提示し、人が経験や価値観、責任を踏まえて最終判断を行う。その役割分担が重要です。物流やものづくりの現場では、効率化だけでなく、安全、品質、安定供給といった価値を守る責任があります。だからこそ、最終的な意思決定は人が担い、人と AI がそれぞれの強みを活かして協働することが、安全・安心で信頼できる AI の活用につながると考えています

編集解説｜AI が提示する選択肢と、人が負う責任。その役割分担を明確にし、現場の安全・品質を守る。

日下 瑞貴 氏

アセンド株式会社｜代表取締役社長

登壇テーマ：なぜ汎用 AI だけでは、物流の現場は変わらないのか？

寄稿メッセージ

> 「安全、安心で信頼できる AI」を物流現場に実装するには、現場の暗黙知をデータ化するだけでなく、「何を良しとするか」という判断基準まで言語化することが重要です。AI に任せる範囲、人が介在する条件、最終責任の所在を定め、判断過程を記録し、現場の結果から改善し続ける。技術と業務を一体で設計することが、AI への信頼と実効性を生みます。

編集解説｜判断基準、人間の関与、責任の所在、改善の循環を一体で設計する必要性を語る。

岡崎 泰之 氏

MLC ベンチャーズ株式会社（三菱倉庫 CVC）｜投資部 マネージャー

登壇テーマ：物流大手のオープンイノベーション・DX の現在地

寄稿メッセージ

> 物流は、大切なモノを安全・確実に届けることで、社会の「いつも」を支える仕事だと考えています。また、これからは AI の活用が企業の競争力に直結するため、 現場での活用は避けて通れません 。だからこそ、AI を安全・安心に活用するためのルールを整えることと、一人ひとりが積極的に使いこなそうとするマインドの両方が重要だと考えます。

編集解説｜ルールの整備だけでなく、使う側の意識と行動の変化が AI 活用を根付かせる。

第 3 章｜現場の知を、変革の力にする

RFID による可視化や暗黙知の言語化など、AI の価値は現場でデータと業務改善がつながるところから生まれる。

松浦　王保 氏

株式会社ケーウェイズ システム開発部｜取締役

登壇テーマ：モノの動きのその先へ。〜見える化から業務改善〜

寄稿メッセージ

> モノが動けば、データが生まれる。RFID×AI で、物流現場を変える。現場のモノの動きをデータ化し、「見える化」から「業務改善」へ。AI 時代の物流 DX、その第一歩をご紹介します。

編集解説｜モノの動きをデータに変えることが、可視化から現場改善へ進むための入口になる。

藤田　紘平 氏

株式会社マーキュリアインベストメント｜事業投資部　ベンチャー投資戦略 投資責任者

登壇テーマ：物流大手のオープンイノベーション・DX の現在地

寄稿メッセージ

> AI は、議論するより、まず使ってみることが大切だと思います。製造業・物流業には、現場の熟練者しか持っていない膨大な「暗黙知」があります。それを AI が扱える形に変え、組織の知恵として共有できれば、大きな競争力になる。AI を使わないこと自体がリスクになる時代だと考えています。

編集解説｜熟練者が持つ暗黙知を組織の知恵に変えることが、AI 時代の競争力をつくる。

第 4 章｜企業を越えて、物流を変える

物流の変革は一社だけでは完結しない。荷主・倉庫・運送会社・投資家・行政が、信頼と対話を基盤に行動する必要がある。

齋藤 拓也 氏

株式会社エル・ティー・エス　社会インフラ事業部 ソーシャルイノベーション推進室｜コンサルタント

登壇テーマ：物流大手のオープンイノベーション・DX の現在地

寄稿メッセージ

> 物流業界で AI・DX を浸透させるため、最も重要な論点は「共創」です。テクノロジーが加速度的に進化する現代では、その速度にステークホルダー間の合意形成が追いつかず、共創のハードルが高くなっています。「立場の異なる相手との信頼関係」、これが共創を前に進める鍵です。広島 AI プロセスを掲げるこの地域から、関係者が信頼で繋がることで、可能性を解き放ち、世界に先駆ける物流地域を目指せると、私は信じています。

編集解説｜技術の進化に合意形成が追いつきにくい時代だからこそ、立場を越えた信頼関係が共創の条件となる。

髙城　幸治 氏

経済産業省 中国経済産業局　地域経済部 イノベーション推進課｜課長

登壇テーマ：広島は、AI 物流の実験都市になれるのか？　〜政策・産業・大学が描く、日本発の物流イノベーション構想〜

寄稿メッセージ

> 「安全・安心で信頼できる AI 物流」の実現は、経営戦略として物流戦略を捉え直し、AI 実装による荷主・倉庫・運送会社の新たな関係性を構築することであり、オープンイノベーションの視点からも、物流を起点とした新たな価値創造につながる大きな可能性があります。物流領域を新たなフロンティア、成長エンジンに変えていくために、関係者間の相互理解と合意形成に向けたオープン・クローズ両方での対話、コミュニケーションの深化が重要です。

編集解説｜物流戦略を経営戦略として捉え直し、企業間の関係性そのものを設計することが新たな成長につながる。

北村　雄二 氏

国土交通省　中国運輸局　交通政策部　環境・物流課｜課長補佐

登壇テーマ：物流政策は、いまどこへ向かうのか。行政を取り巻く現状と課題。

寄稿メッセージ

> 物流行政において輸送力不足が喫緊の課題となっており、必要な物流機能の維持する施策として物流効率化、物流 DX などが必要とされています。国土交通省では物流効率化法、物流関係補助制度を通じて荷主企業、物流事業者の物流効率化を支援しており、それらの活用事例が蓄積されています。企業によって物流効率化の阻害要因や解消のアプローチは様々かと思いますが、本講演が物流効率化のヒントになればと思います。

編集解説｜輸送力不足という政策課題に対し、物流効率化や DX を現実の選択肢として捉える。

結び｜「信頼」を、現場の動く仕組みに変える

11 人の言葉は、同じ結論を繰り返しているわけではない。ある人は共創を語り、ある人は人の最終判断を重視し、別の人は検証可能な採用条件を求める。それでも、AI を現場で安全に活用するためには技術だけでなく、業務・人・ルール・企業間関係を同時に設計しなければならないという点で響き合っている。

広島から目指すのは、AI の可能性を語るだけの場ではない。荷主、製造業、物流事業者、テクノロジー企業、行政、研究者が、それぞれの立場を尊重しながら、小さな実証を積み上げ、判断の条件と成果を確かめ、再現可能な形にしていくことである。

このメッセージ集を、開催の記念ではなく次の行動への出発点として届けたい。AI 物流は、信頼から動き出す。その信頼を、検証できる判断と、実際に改善が続く現場の仕組みに変える挑戦は、ここから始まる。

発行情報

対象イベント：製造業 AI 物流カンファレンス 2026 in 広島（2026 年 10 月 14 日開催）
編集・発行：株式会社オンザリンクス
原稿構成：登壇者から寄せられたメッセージ原文＋編集解説
公式サイト：https://www.onzalinx.co.jp/conference2026/

公開前の確認事項：氏名・所属・役職の最新表記、原文の最終校正、寄稿者ごとの公開承諾をご確認ください。